

## 豊明希望チャペル礼拝

2024/1/21

「完了した」

ヨハネの福音書 19 : 28～30

前回、「十字架上の七つのことば」の一つから、教えられました。

ヨハネの福音書では、その七つのことばの内、三つが出てくるのですが、その一つが前回の、「あなたの息子です。あなたの母です。」のことばでした。そして、今日は、「わたしは渇く」と「完了した」の二つのことばが出てきます。もっとも、その中心は、「完了した」であって、この「わたしは渇く」という一言にも、ヨハネは、「イエスはすべてのことが完了したのを知ると、聖書が成就するために、「わたしは渇く」と言われたと、完了したことの言い方として、イエス様は、「渇く」と言われたのであると、そこが強調されていますので、そんなことを思いながら、今日は、以前したように、御言葉を追いながら、黙想し、御言葉を味わっていきたいと思います。

そういうわけで、今日の箇所の最初の聖句です。

「19:28 それから、イエスはすべてのことが完了したのを知ると、聖書が成就するために、「わたしは渇く」と言われた。」(黙想)



喉(のど)が渇いた。その意味は、十字架刑は、手から足から徐々に血液が外へ流れていき死ぬ。水分が外へ出るわけですから、喉が渇くというのは、そういう血が体から出ていく症状だと説明され、それは、十字架にかかる人の典型的な命の最後の苦しみだとも言われます。そして、それは、経験したことのない、尋常でない喉の渇きだとも言われます。

しかし、それは、単に肉体の苦しみ、かわきではなく、魂のあえぎであったと言われます。他の聖書では、「エロイ・ロイ・ラマ・サバクタニ（わが神。わが神。どうしてわたしをお見捨てになったのですか）」との叫びと重なるときだとも理解されています。旧約聖書に、「鹿が谷川の流れを（水を求めて、渴いて）慕いあえぐように、神よ。私のたましいはあなたを慕いあえぎます。」（詩篇 42：1）とありますが、それは、まさに、私たちの罪のゆえの、あえぎであり、苦しみでした。

アウグスチヌスは、「イエスは十字架上で『我、渴く』とおっしゃいました。しかし、人々はイエスが求めていたものをイエスに与えませんでした（ローマ兵はぶどう酒を口元に差し出しましたが）イエスは、彼ら（の救い）を渴き求めていたのです。」と言いました。

私たちが救われるための最後の渴きであり、私たちが救われて欲しい、このローマ兵も含めて、何としても救われて欲しいという、最後の、命がけで最後の力を振り絞った、私たちへの愛の希求であった、祈りであったというのです。

ヨハネは、さらに、このことば「渴く」の意味を、「（イエス様が）すべてのことが完了したことを知る」ことを意味し、「聖書が成就するため」だった、そのことばだと言いました。

それは、繰り返しますが、聖書が成就するとは、私たちの救いが完成する、十字架で、人の罪が私が苦しみ、死ぬことで、救いが成就するということだという意味で、そして、より強調が置かれているのは、それは、「完成した」あるいは、次の聖句につながる「完了した」ことの意味だと、ヨハネは強調するのです。

ここで、黙想したいのは、私たちのことでもあります。それは、私たちも、死をまえにするような、絶望的な「渴き」を経験することがあるだろうということです。

苦しいとき、ましてや、苦しみの頂点にあるような、人生の、そして、病気の時であっても、そんな苦しみの時、それは、けっして、「完成した」「完了した」と思えないことがほとんどだと思います。



能登地震で、ビルが倒れた様子を見た人も多いと思います。先日、牧師会で、輪島聖書教会の牧師の荒川師の、7日の礼拝でのメッセージを牧師達で聞かせていただきました。輪島市の惨状は、私たちが思う以上に悲惨で会った事をあらためて思わされたのですが、そのなかで、このビルの下敷きになったのは、母と娘の親子であり、その娘さん

は、外国で国際協力機構(JICA)?で救済活動で働くために、教会の英会話クラスで学んでいた方だったと言われました。

苦しみと渇きの中で、その命を神に渡すとき、いったい、どれほどの人が、「完成した」「完了した」と言えるだろうかと思うのです。けっして言えない。もっと、素晴らしい、ましてや、彼女のように、人の役に立ちたいと思って生きていた、その人生が、十分であった、完了したと言えただろうか、未完了だと、多くの人は嘆いたに違いないのです。

そこで、30節を読みます。

「19:29 酸いぶどう酒がいっぱい入った器がそこに置いてあったので、兵士たちは、酸いぶどう酒を含んだ海綿をヒソプの枝に付けて、イエスの口もとに差し出した。19:30 イエスは酸いぶどう酒を受けると、「完了した」と言われた。そして、頭を垂れて霊をお渡しになった。」(黙想)

「完了した」ここに注目します。

この完了という言葉。借金や負債が完済したという時に使われた言葉です。ギリシャ語で、「テタラストイ」と言う言葉ですが、イスラエルで発掘された当時の会計士の事務所から、借金の証文の束が発見されたのですが、その証文には、テタラストイと言う文字が、殴り書きされていました。それは、借金が完済されたと言う意味でありました(ユダヤ人：フルクテンバウム師)。

私たちは、その意味が、イエス様が、私たちの罪が完全に贖われた、もう借金はなにもない。神に対しても悪魔に対しても、死に対しても、赦しは完了した、それを意味する言葉であろう事を容易に理解することが出来るのであります。



この像は、有名な、ミケランジェロのピエタ像ですが、十字架から降ろされたイエス様を、マリヤが受け取った?とされる場面です。母は、イエス様の渇きにこそ、悲しみを深くし、どんなに息子は苦しんだらうかと涙と苦しみがあっても、「完了した」とは、それは、決して思えないことであるはずです。

息子が犯罪人として、鞭で打たれ、十字架を背負わされて町中をひきまわされ、十字架に釘付けにされ、大勢の人々のさらしものとされた、その末に、わが子の処刑を目の前に見せられることほど残酷なことはありません。マリヤはその嘆きと悲しみのために



十字架の下に泣き崩れていたことでしょう。イエス様の苦しみの大きさを完全には理解できないように、同じくらい母マリヤの悲しみの大きさも、私たちには十分には分からないでしょう。

親より先に息子に死なれて、これで良かった、成し遂げられたと言える親がどこにいるのでしょうか。せめて親が死ぬまで生きて欲しかった。少なくとも、それでこそ、マリヤにとっては、完了なのです。恐らく、この思いは、そこにいたヨハネや女達、すべての弟子達にとってそうだったのです。誰も決して、「完了した」とは、これで完全だと、思えなかったに違いありません。

前半と同じ繰り返しになるかもしれませんが、イエス様は、何をもって完了と言われたのか。完了とは何を意味しているのか。

繰り返しますが、その意味は、イエス様が、十字架において、最後の言葉として言われたことの意味、それは、私たちの罪が完全に贖われた、もう借金はない。神に対しても悪魔に対しても、死に対しても、完全に罪が赦された、それを意味する言葉であろう事であります。

しかし、私たち、クリスチャンが思わされることは、もうして下さることはない。すでにすべてをして下さった。いつ、死んでも、人生を終えても、私たちは完成させられているという事です。私の家庭の事、私の健康のこと、子供のこと、親のこと、教会のこと、国家のこと、世界のこと。いつも、まだ終わっていないのです。課題が山積みです。しかし、一方で、何もかも終わっている。完全に成し遂げられている、もう語られるべき神の言葉はない、して頂くべき事はない。あなたは十分に私にしてくださいました。「完了した」

私は、洗礼式のことを説明するときに、「洗礼式は、ゴールではない、あらたな



クリスチャンの使命のスタートなのだ」と説明する人がおりますが、まずは、洗礼受けられたことを喜んで下さい。私は、むしろ強調したい。洗礼式はゴールでもある。なぜなら、イエス様は、すでにあなたの救いを完了して下さったからだ。ここからは、その感謝を表す人生ですと言うのです。

一つの証をします。日本基督教団の K 牧師です。彼は、名古屋出身の方です。

「私が、神学校に入学して牧師になりたいとの思いを実家に知らせると、早速、故郷の名古屋に呼び戻されました。そこでは親族会議が叔父の家で開かれ、父は「K 家は代々、仏教の曹洞宗の檀家だ。耶蘇教などにかぶれて、このタワケ！」と言い・・・最後に母が「S や、S の信じるイエス様は『あなたの隣人を自分のように愛しなさい。』」と行ったと聞いているが、S にとって隣人は誰なんだい。S の隣人であるお父さんやお母さん、まわりの人をこんなに心配させ、悲しませて・・・人々に隣人を愛しなさいと勧める牧師になりたいと言うんかね。」と涙を流しながら私を説得しました。この厳しい問いに私は何も答えることが出来ず、二時間ただ泣いていたことを今でもはっきりと思い出します。」そして、その後のことを、こう言われます。「・・・私と家族、特に父と母との関係は徐々に回復されて行きました。・・・私のことを「耶蘇教にかぶれてしまっ」と強く反対し「K 家の人間ではない。出て行け！」と言った父も富山の教会に赴任していた時、孫に会いたさもあって家族と揃って遊びに来てくれました。そして死の直前、誰もいない病室でほぼ半日二人だけで過ごした時、半分意識がない中で「S(息子)だよ、分かる？ 分かったら手を握り返してくれる？」と言った時、強くではなかったけれど確かに握り返してくれました。父の手を握りながら、神様が父との和解の時を与えて下さったことを実感しました。と。両親がすべてを納得し、自分も神様も受け入れてくれたことを、このように語られたのだと思います。

イエス様の、「完了した」という言葉、特に、それも十字架上で、一見、人生の敗北と思えるような最後にあって、そのように言われたことは、私たちの生き方にとって示唆を与えるものです。

ヨハネは、この、ヒソブにぶどう酒をつけて、ローマ兵が、イエス様の口元に運んだとき、まさに、それも、聖書の成就であり完成だったと言います。

「口は渴いて素焼きのかけらとなり、舌は上あごにはり付く。あなたはわたしを塵と死の中に打ち捨てられる」(詩編 22・16) また、詩篇 19:29「そこには酸いぶどう酒のいっぱい入った入れ物が置いてあった。そこで彼らは、酸いぶどう酒を含んだ海綿をヒソブの枝につけて、それをイエスの口もとに差し出した。」

御心はなる。決して早かったと後悔してはならない、遅かったと思ってもならない、神は、見ておられる、そして、完成させて下さる。私の人生にあっても。それは、完成だ、完了だ、十分だったと、そう確信できるということです。

すべてが計画通り、完璧であったと。



『ジーザス・クライスト・スーパースター』というミュージカル映画で、いま十字架にかかろうとするイエスを見つめながら、既に死んだイスカリオテのユダが現われ『お前の十字架は予定外か？いろんな宗教の教祖たちのなかで、そんな死に方はお前だけだ』と歌う。しかし、完了したとイエス様は今朝、おっしゃられるのです。予定外でも、未完成でもない、イエス・キリストを信じる人にとって、人生の苦しみでさえ、解決のないまま死んだと思えるような人生であっても、未完成ではなく、それは、いつも救いの完成であります。なぜなら、信じる者には、完全な救いが与えられているからです。

今週の歩み、今週召されようと、明日召されようと、完了を保証してくださる、いやすでに十字架でして下さったこのイエス様を見上げながら、希望の歩み、感謝の歩みを歩む、精一杯生ききる、この週でありたいと願います。祈ります。